

氏名	鈴木 亜矢子
ヨミガナ	スズキ アヤコ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第2号
学位授与年月日	平成29年3月18日
学位論文題目	山田耕筰・別宮貞雄・團伊玖磨の日本歌曲 ——アクセント理論を起点とした分析的研究——
博士論文審査委員会	（主査） 教授 武石 みどり（音楽学） （副査） 教授 佐野 成宏（声楽） （副査） 教授 村田 千尋（音楽学） （副査） 准教授 緑川 まり（声楽） （副査） 三枝 まり（音楽学） （桐朋学園大学日本学術振興会特別研究員 RPD）
博士演奏等審査委員会	（主査） 教授 武石 みどり（音楽学） （副査） 教授 佐野 成宏（声楽） （副査） 教授 横山 恵子（声楽） （副査） 教授 清水 和音（器楽（ピアノ）） （副査） 教授 菅原 淳（器楽（打楽器）） （副査） 教授 藤原 豊（作曲・ソルフェージュ） （副査） 准教授 緑川 まり（声楽） （副査） 青山 恵子（声楽） （東京室内歌劇場会員、 奏楽堂「日本歌曲コンクール」審査委員）

審査結果の要旨

1. 博士論文審査委員会

日 時	平成 29 年 2 月 9 日 (木) 14 時 30 分～16 時 15 分
場 所	東京音楽大学 J208
判 定	合格。但し、誤字・脱字の修正、および本審査委員会が指摘する諸点についての補足を論文に加えること。
審査結果の要旨	<p>山田耕筰とその次世代の作曲家、別宮貞雄と團伊玖磨をとりあげ、山田が提唱したアクセント理論がどのようにそれぞれの作品の中で実践されているのかを分析して数値データで示すとともに、三人の作曲家の言説を追いながら、アクセント理論から離れて実践された他の作曲上の工夫についても言及した。演奏家として、実際にどのように日本語を表現するかという問題意識の下に、論旨、構成、方法論を明確に示した論文であり、今後の日本歌曲の演奏において指針となる結論を導き出すことができた点で高く評価できる。</p> <p>本審査時の口頭試問においては、審査員の疑問に対して的確な回答をなし、また回答できなかった問題についても本人が十分に問題を理解し、今後の課題として捉えていることが伝わった。したがって、論文内容・口頭試問ともに演奏学の学位論文として認め得る内容を有するものとして評価した次第である。</p> <p>但し、以下の諸点については説明不足であると思われるため、誤字・脱字の修正時に、補足を添付することを求めたい。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 童謡を対象曲からはずした理由2. 対象とした作曲家の選定基準 特に第二世代の二人を選んだ理由3. 『NHK 日本語発音アクセント新辞典』に従い、5～7 文字前後のフレーズに区切って分析しているため、フレーズの繋がりによる変化、疑問や詠嘆、表現による揺れ、あるいは方言によるアクセントの違いといった要素については考慮に入れていないことを明記4. アクセント分析においてメリスマの扱い方についての説明5. 各作曲家の創作上の背景についての補足

2. 博士演奏等審査委員会

日 時	平成 28 年 7 月 20 日 (水) 19 時 00 分～20 時 00 分
場 所	東京音楽大学 J スタジオ
判 定	プログラム各曲の演奏は、処々に改善すべき点が見られ決して最高点とは言えないが、研究内容を反映した意欲的なプログラミングと、作品に取り組む真摯な姿勢が表れた演奏であったことを含めて総合的に勘案した結果、今回の演奏は博士学位申請に足る内容をもつものとして評価できるという結論に至った。
審査結果の要旨	<p>博士学位審査演奏会では、博士論文において論ずる山田耕筰、別宮貞雄、團伊玖磨、香月修、土田英介、西村朗の歌曲のうち、山田耕筰と香月修、西村朗の作品がプログラムとして取り上げられた。</p> <p>香月修《三好達治の詩による四つの歌》より 1. 少年、2. 物語 西村朗《萩原朔太郎の詩による二つの歌曲》より 3. 涅槃、4. 輪廻 山田耕筰 5. 《野薔薇》 6. 《樹立》 7. 《この道》 《風に寄せて歌へる春の歌》より 8. 青き臥床をわれ飾る、9. 君がため織る綾錦、10. 光に顫ひ、日に舞へる、11. たたへよ、しらべよ、歌ひつれよ</p> <p>これまで 2 回の博士リサイタルにおいて、1 回目は山田耕筰と別宮貞雄、2 回目は山田耕筰と土田英介の歌曲を歌ったため、博士論文で論ずる 6 人の作曲家のうち、團伊玖磨を除く 5 人の作曲家の作品を 3 回のリサイタルで取り上げたこととなる。日本語をどのように音楽にのせて歌うかという問題を歴史的に探究する研究内容を反映したプログラミングであり、今回は特に演奏機会の少ない香月・西村作品を取り上げたこと、また山田作品を後半に置くことにより、現代作曲家と山田耕筰との間に共通性があると同時に、現代作曲家の作品では山田作品にならない言葉の処理の仕方があるといった相違点にも気づかせる内容であった点は高く評価できる。</p> <p>演奏全般については、声が素直で透明感があり、よく通り、またヴィブラートも最小限で日本歌曲に合っている点が高く評価できる。申請者の取り組む主要課題である「日本語として聞こえ、伝わる歌い方」という点において、プログラムでもわかりやすく解説され、その研究意図が十分伝わった一方で、実際の歌唱テクニックの点で不十分さが感じられるという意見が複数の審査員から出た。歌詞が聞き取れず言葉が伝わってこない箇所が目立ったことは、今後克服すべき大きな課題である。特に「ウ」の音の発音が浅いことが短所として指摘された。日本語が言葉として聞き取れるように文脈に応じた歌い分けをするべく、声の色、厚み、深み、声質の変化を多様に具え、使いこなしていくこと、日本語の長音、促音に対してさらに細やかな意識をもつことが今後の課題と言えよう。</p> <p>香月修の歌曲の演奏では、特に「2. 物語」における表現力が高く評価された。西村作品においては、ピアノが演奏を始めてから歌手が舞台上に登場するなど、演出を工夫し、楽譜には指定されていない舞台上での動きが加えられた。心の内面にあるさまざま思いと揺らぎを表す詩の内容を映し出すために、ピアノの表現力</p>

<p>に加えて、歌手の身体の動きを自由創作して表現の一手段としたものであり、現代歌曲作品の演奏の可能性を探る新しい試みとして評価される。後半の山田作品は、歌う音と音の間に歌手の表現力が求められるため、その意味でより難しい課題であった。歌いだしの音のクォリティ、音程の取り方にもっと気を配り、ことばの内容を深く映し出す声の色を探究してほしいという意見が複数の審査員から出された。日本歌曲の演奏者として、こうした演奏上の細かな問題点を一つずつクリアし今後さらに研鑽を積むことが期待される。</p>
--

以上